



●特集：子どもたちの学びとジェンダー平等

【寄稿】虎岩朋加さん(梶山女学園大学 人間関係学部 教授)

「かくれたカリキュラム」とはなにか～教室の「当たり前」から考えるジェンダー公正～

【インタビュー】藤木直実さん(日本近現代文学研究者)

絵本でひらくジェンダーのレッスン

●リーブラからのお知らせ

第46回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2026を開催

「かくれたカリキュラム」とはなにか ～教室の「当たり前」から考えるジェンダー公正～

【寄稿】 ^{とらいわ} 虎岩 ^{ともか} 朋加さん

「学校は社会の縮図」と言われます。子どもたちは大人の言動や行動を見て、性別役割の考え方や「女性／男性らしい」振る舞いを感じ取り、徐々に身に付けてしまうことがわかっています。特に教育学の分野では、こうした伝播のシステムは「かくれたカリキュラム」という名で知られ、現在も研究が進んでいます。今回は、フェミニズムおよびジェンダーの観点から教育学を研究する、嵯山女学園大学教授 虎岩朋加さんに、この「かくれたカリキュラム」とは何か、どんな場面で学んでいくものなのか、そしてどのように公正な教育へ近づいていくことができるのかについて、ご寄稿いただきました。

「そんな笑い方してるとモテないぞ」

「そんな笑い方してるとモテないぞ」。私が担当している「教育とジェンダー」という科目の最終レポートとして学生が書いたものの中に、高校時代に教員に言われた言葉として、こんな言葉が書いてありました。

この言葉からわかるのは、「笑い方」という身体表現まで、「女の子」としてどのようにふるまうべきかについてのルールのようなものが課されるということです。冒頭に掲げた先生の言葉「そんな笑い方してるとモテないぞ」は、一般的に女性らしいと思われている笑い方とは異なる表現の仕方で、自分の楽しい気持ちを表現していた女子生徒に向けられた言葉でした。「そんな笑い方」が具体的にはどんな笑い方かはわかりませんが、「モテないぞ」と

いう言葉から推察すれば、その笑い方はその先生（学生レポートによれば男性）からみて、「女性らしい」笑い方とは異なる、したがって、異性の目から見ても魅力的には映らない笑い方とみなされたのでしょう。何かに反応して自然に表れた身体表現が、他者から見て「女性らしくない」と判断され規制されたのです。そのように声をかけられた女子生徒は、以後、自分の笑い方を意識し、抑えるようになるかもしれません。

おそらく、この男性教員は生徒を傷つけようとしてこの言葉を言ったわけではないでしょう。冗談や親しみを込めたつもりだったかもしれません。しかし、意図が善意であることと、言葉が伝える規範とは別の問題です。同じ言葉が男子生徒に向けられることはほとんどないでしょう。ここでは女性は「男性からどう見られるか」を常に意識すべき存在であ

るという価値観を伝えています。外部からの評価基準が、生徒自身の内面的な自己監視システムへすり替わる瞬間を写し取ったものとして、男性教員から女子生徒への言葉の投げかけを受け止めたこの女子学生のレポートは、どのように「かくれたカリキュラム」が教室の中に存在しているかを明快に示すものでもあります。



虎岩さんの著書
『教室から編みだすフェミニズム
——フェミニスト・ペダゴジーの挑戦』
(2023年、大月書店)

教えられていないことも、子どもは学んでいる

女性と男性が同じ学校で同じ教科を学ぶ制度が整っていても、そこで経験することまで同じとは限りません。数字に表れにくい日常の学びに目を向けるための言葉が、「かくれたカリキュラム」です。「かくれたカリキュラム」とは、教科書や学習指導要領に明記されてはいないものの、学校生活の中で子どもたちが学び取っていく規範、価値、信念の体系のことを指します。教師の言葉だけではなく、席の並べ方、係の分担、行事での役割や、友だち同士のやりとりなどを通して伝わります。たとえば、発言するときは手をあげること、立ち上がるときは許可を得ること、チャイムが次の行動の合図になるこ

となどは、「かくれたカリキュラム」の一部でしょう。学校では、教科の知識だけではなく、集団のなかでどう行動するかも学びます。このような学びは、集団生活を可能にする一方で、社会に存在する偏見や不平等まで「当たり前」として伝えてしまうことがあります。

「かくれたカリキュラム」は、ジェンダー規範を伝える媒体でもあります。明示的なカリキュラムや教科内容の面で性別による扱いの違いがなくても、学校でのやりとりを通じて児童・生徒たちが知らないうちに自然なものとして身につけていくジェンダー規範（たとえば、性別によって異なる役割を担うべきだといった考え方、つまり性別役割分担意識）があることを「かくれたカリキュラム」の研究は明らかにしてきました。たとえば、学校行事の準備で教師が女子生徒には「教室の飾り付けを手伝って」と言う一方、男子生徒には「机を移動させて」と頼むとき、「男子は力仕事、女子は人を支えたり、きれいに整えたりする役割」と明確に説明しなくても、性別によって期待される役割が違うのだと子どもたちは学んでいきます。しかも、その学びは「役割分担」として自然におこなわれ、ジェンダー規範を伝えているとは気づかれにくいのです。

さらに同じ行動であっても、子どもの性別によって異なる意味づけがなされることがあります。たとえば、よく発言する子どもが、男子なら「積極的」「リーダー向き」、女子なら「でしゃばっている」と受け止められることがあります。反対に、女子は「気が利く」「面倒見が良い」ことが評価され、世話をする役割を期待されやすくなることがあります。

もちろん、こうした評価のされ方は、時代や地域、学校によっても異なります。では、私たちの身近な学校ではどうでしょうか。

「性別役割分担」だけではなく「笑い方」といった身体表現までも、冒頭の先生のような発言が「かくれたカリキュラム」として伝わり、子どもの中に自己の身体の動きを規制する命令として据え付けられていきます。ここでは「女の子」は「見られる存在」としての主体となるように形成されていくのです。そのような「命令」は、「男の子」には向けられません。教育社会学者の木村涼子氏は、学校が「かくれたカリキュラム」を通して、女性と男性は異なる存在であり、異なる役割を担うべきだという考え方を伝えていると指摘しています。それは、女性と男性を対等ではないものとして位置づける「性差別（セクシズム）」にもつながります。

気づき、問い直し、やり直す

以上のように、「かくれたカリキュラム」は、学校の日常生活の中に、先生の言動や、教室の環境、子どもたちのやり取りの中に潜んでいます。無意識な分、余計に強かにジェンダー規範が伝わっていきます。ジェンダー規範は単に男女を区別するだけではなく、しばしば序列関係や役割の偏りを伴っています。したがって、学校もまた性差別を次の世代に伝える場になりえるのです。

その一方で、学校は直接的に人間形成に働きかけているという意味で、ジェンダー規範を変えていく実践が可能な場でもあります。少しの行動の違いで

可能になるという点で、かなり大きな潜在力をもっているとも言えます。学校の中で起こっているさまざまなことに、いつもよりももう少し注意を向けて、次のようなことに気づいてみるのが、最初の一歩になりえます。たとえば、「女の子だから」「男の子だから」と説明してはいないでしょうか。同じ行動を、子どもの性別によって異なって評価していないでしょうか。無意識に性別で役割を割り振っていないでしょうか。子どもが、その性別らしくない選択をした時に、笑ったり、からかったり、驚いたりしてはいないでしょうか。

私たちは誰も、社会の「当たり前」から自由ではありません。大切なのは、自分に偏見がないと思うことではなく、気づいたときに問い直し、やり直すことです。役割の決め方や子どもへの一言を少し変えることが「当たり前」を変えるきっかけになります。「気づき、問い直し、やり直す」は、特定の誰かに有利に働いている現在の社会の秩序を少しずつ変えていくことにつながります。より公正な社会へ、学校がその足場となることが私の希望です。

執筆者プロフィール

とら いわ とも か
虎岩 朋加さん

椋山女学園大学
人間関係学部 教授

専門は教育学。教員養成課程での教育に従事しつつ、フェミニズムから教

育学を考える研究をしてきた。著書に『教室から編みだすフェミニズム——フェミニスト・ペダゴジーの挑戦』（大月書店、2023年）、編著に『学校の「男性性」を問う——教室の「あたりまえ」をほぐす理論と実践』（旬報社、2025年）がある。



絵本でひらくジェンダーのレッスン

【インタビュー】^{ふじ き} 藤木 ^{なお み} 直実さん

近年、ジェンダーやセクシュアリティをテーマにした絵本や子どもの本が数多く刊行されています。一方で、それらをしっかり読み解くための考え方や読み方は、まだ十分に広まっているとはいえません。『子どもの本でジェンダーレッスン——学びたいあなたのためのブックガイド』（かもがわ出版、2025年）は、絵本をはじめとする子どもたちのための本をジェンダーの視点から読み解くブックガイドです。今回は、本書の編者である藤木直実さんに、ジェンダーの視点から絵本を読むことの面白さや、その読み方についてお話を伺いました。

1. 『子どもの本でジェンダーレッスン』ができるまで

きっかけは、とあるベストセラー絵本を読んだとき、そこにジェンダーの視点から見過ごすことのできない問題を感じたことです。私は日本近代文学が専門で、絵本を論じたことはありませんでしたが、この問題意識を広く共有する必要を感じました。そこで、のちに本書の執筆者となる方々を招いたシンポジウムを開催しました。これが大きな反響を呼び、ぜひ本にしてほしいという声が多く寄せられました。

もともと論集としてまとめる予定でしたが、研究者に限らず、保護者や教育関係者、司書など幅広い

方に絵本選びの参考にしてもらえるようブックガイドにすることにしました。また、当初は「ジェンダー絵本」として評価されている作品を中心に読みましたが、それだけでは私たちの問題



藤木直実（編著）、吉良智子・神保和子・中西恭子・宮下美砂子（著）
『子どもの本でジェンダーレッスン——学びたいあなたのためのブックガイド』
（かもがわ出版、2025年）

意識に十分応えられないと感じました。そこで、世評にとらわれず、私たち執筆者それぞれが良いと思う絵本を持ち寄って読み合うことにしました。

2. 『はなのすきなうし』

選書に際して私たちが重視したのは、「既存のジェンダー秩序（男性／女性を固定的に二分し序列化する社会の構造）」を揺さぶり、問い直すように読める作品であるかどうかということです。

その意味で『はなのすきなうし』（文：マンロー・リーフ、絵：ロバート・ローソン、訳：光吉夏弥、岩波書店、1954年）は非常に重要な作品です。この作品は1936年にアメリカで刊行された古典で、戦時中は発禁処分や焼却処分をされながらも、第2次世界大戦後に復刻され今日まで読み継がれています。これまで必ずしもジェンダーの視点



文：マンロー・リーフ、絵：ロバート・ローソン、訳：光吉夏弥『はなのすきなうし』
（岩波書店、1954年）

で読まれてきたわけではありませんが、花を愛し闘うことを望まない主人公の雄牛「ふえるじなんど」の姿は、戦争や暴力と結びついた「男らしさ」に明確に異議を申し立てています。既存の男性性規範を静かに攪乱する作品だといえます。

3. 『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』

絵本を通してジェンダーについて学び始める方には、まず伝記絵本がおすすめです。たとえば『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』（作：キース・ネグレー、訳：石井睦美、光村教育図書、2020年）は、とても優れた作品です。

この物語は、1人の少女が当時の社会的なタブーを乗り越え、自分の道を切り拓いていく過程を描いています。今では当たり前になっている「女性がズボンを履く」ということでさえも、歴史の中では先人たちの挑戦によって獲得されてきた権利であることがわかります。

服装における「男は男らしく、女は女らしく」というジェンダー規範は、近代社会において非常に強いものでした。そのため、こうした規範を越境する行為には強い抵抗や抑圧が生じます。しかし主人公の少女はそうした周囲の戸惑いを価値観の変化へと導いていきます。短い物語の中に、ジェンダー規範を乗り越えるというテーマが、説教臭さを感じさせない語り口と親しみやすい絵によって表現されていると思います。

なお本書は、最初期にズボンを



作：キース・ネグレー、訳：石井睦美『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』（光村教育図書、2020年）

いた女性のひとりであるアメリカの軍医、メアリー・E・ウォーカー博士の幼少期をモデルにしています。

4. 『ジュリアンはマーメイド』

『ジュリアンはマーメイド』（文・絵：ジェシカ・ラブ、訳・横山和江、サウザンブックス社、2020年）は、今回ご紹介する中では最も小さなお子さんからでも読むことができる内容だと思います。

主人公の男の子ジュリアンは地下鉄の中で人魚の扮装をした人たちとすれ違い、自分もマーメイドになりきって海の中を自由自在に泳ぐ姿を想像します。それは、現実で感じる抑圧の裏返しであり、ジュリアンにとってマーメイドは、抑圧からの解放を象徴する存在として描かれています。家に帰ったジュリアンは、おばあちゃんに「ぼくもマーメイドなんだ」と打ち明けます。すると、おばあちゃんは自然に受け入れます。ジュリアンがマーメイドになりきってカーテンをちぎってしまっても、おばあちゃんは咎めることなく、ジュリアンをパレードへ連れ出し、ジュリアンに仲間の存在を示してくれます。「人種とジェンダー」という観点からも読むことのできるすばらしい作品です。



文・絵：ジェシカ・ラブ、訳：横山和江『ジュリアンはマーメイド』（サウザンブックス社、2020年）

5. 『ふたりママの家で』

『ふたりママの家で』（文・絵：パトリシア・ポラッコ、訳：中川亜紀子、サウザンブックス社、2018

年)は、同性カップル(「ふたりママ」)の家族を描いています。

そのカップルのもとに養子として迎えられた子どもたちには、紛争地域から来た子どもや、生後すぐに養育を放棄された子どもなど、さまざまな背景があることが窺えます。また、「ふたりママ」自身にもイタリア移民としてのルーツがあります。

物語では、地域社会との関わりの中で、同性カップルに対して露骨な嫌悪感を示す住民も登場します。しかし、この作品はそうした人物を排除はせず、ママたちは「あの人は怖がっているだけよ」「わからないものが怖い」と語りかけ、相手の偏見の背景にも目を向けようとしています。1つの物語としても絵本としても完成度が高く、多様な家族、移民、紛争、偏見といったテーマを重層的に描いた作品です。



文・絵：パトリシア・ポラッコ、訳：中川亜紀子『ふたりママの家』（サウザンブックス社、2018年）

6. 『いもうとのデージー』

『子どもの本でジェンダーレッスン』刊行後に翻訳出版されたため、収録できなかった作品として、『いもうとのデージー』（作：エイドリア・カールソン、絵：ライナス・クルチ、訳：松浦直美、偕成社、2026年）があります。トランスジェンダーの子どもと家族の姿を、兄の視点から描いた絵本です。

主人公は、仲良しの大切な「弟」から、「わたし、ほんとに女の子だよ」と打ち明けられます。変化に戸惑う兄に焦点を当て、トランスジェンダーの子どもとそのきょうだい新しい関係性を結び直すまでをリアルに描き出すお話です。兄の葛藤に寄り添

う両親の姿も印象的です。すべてのきょうだい児への温かなエールが込められた一冊です。



作：エイドリア・カールソン、絵：ライナス・クルチ、訳：松浦直美『いもうとのデージー——男の子だと思っていたきみを、女の子としてうけいれるまで』（偕成社、2026年）

7. 絵本を通してエンパワメントの種をまく

子どもの頃から絵本を通してジェンダーについて学ぶことは、その人の中に「エンパワメントの種」をまくことにつながると思います。生きていくことに困難を抱えない人はいません。その種は、人生のどこかのタイミングで芽を出すことがあるかもしれません。だからこそ、誰にとっても「エンパワメントの種」は必要なのだと思います。また、マジョリティの人たちにとっては、こうした絵本は多様性を学ぶ機会にもなるでしょう。異なる背景や価値観を持つ人々について知ることは、社会の中で生じるさまざまな摩擦や対立を理解する手がかりにもなります。

話者プロフィール

ふじ き なお み
藤木 直実さん

日本近現代文学研究者
日本女子大学ほか非常勤講師

共編著に『〈妊婦〉アート論』（青弓社、2018年）、共著に『東アジアの都市とジェンダー』（文学通信、2023年）、『現代女性文学論』『〈パンデミック〉とフェミニズム』（翰林書房、2022年）、『女学生とジェンダー』（笠間書院、2019年）、『日本文学の「女性性」』（思文閣出版、2011年）、論文に『〈母〉を葬るために——のぶみ『ママがおばけになっちゃった!』を読む』（『日本児童文学』2019.7-8）、『被傷性とゆるやかな連帯と——梨木香歩『僕は、そして僕たちはどう生きるか』を読む』（『日本児童文学』2018.9-10）などがある。



第46回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2026を開催

港区立男女平等参画センター（リーブラ）は1980年に開設し、今年46年目を迎えました。年に1回開催する男女平等参画フェスタは、登録団体で構成される実行委員会が中心となり話し合いを重ね、活動内容の発表等を通じて、男女平等参画について楽しく学ぶ場を作っています。

6月26日(金)には前夜祭として、国際政治学者・青山学院大学名誉教授の羽場久美子さんによる主講演「ジェンダー平等ってなに？ 世界基準で考える変化」を開催。27日(土)の開会式では港区長 清家愛氏から挨拶をいただきました。悪天候の中、28日(日)までの3日間で1,789人の方にご来場いただきました。



開会式で挨拶される清家区長

リーブラで活動する団体の参加は、料理・茶道チーム4団体、ステージチーム21団体、展示チーム17団体、講座企画チーム3団体、広報チーム1団体、催しもの企画チーム2団体でした。また、39団体が当日の運営スタッフとして参加しました。

ステージチームでは、お子さんから経験豊富な方までさまざまな世代による合唱や朗読劇、フラダンス、社交ダンス、日本舞踊の発表などが行われ、各団体が日頃の活動成果を発表しました。

展示および料理・茶道チームでは、手芸、ものづくりなどの団体や社会貢献、男女平等の活動団体が、日ごろの成果物を展示・販売・発表しました。また、ウクライナ料理やエシカル喫茶のほか茶道のレクチャーなどもあり、お腹も満たされる楽しいスペースになりました。

催しもの企画チームでは、お子さんが参加できる縁日や、オリジナル布ワッペンを作ろう！企画、また、団体の活動を紹介する展示などを行いました。

講座企画チームは、団体ごとの特徴を活かした男女平等参画社会実現に向けた講座を開催しました。



りぶらミニ縁日



ハロハロ

キャッチコピー「私」がひらく現在・未来」には、あらゆる人が自分らしく、性別にとらわれない「その人らしさ」を発揮できる機会を保障する社会の実現がこめられています。当施設を利用する団体が一堂に会し、ジェンダー平等についての思いを発表しながら、多彩な活動を紹介する機会となっています。約90以上の登録団体の中で、フェスタに参画する各部門の代表から選出された11人で構成する実行委員会をこの半年間で3回開催し、広報物の検討、発送等を行いました。当日は、台風7・8号が接近する中で、参加者の安全最優先での開催となりましたが、お陰様で無事終了することができました。親子連れの参加者も多数来場し、幼少期から「ジェンダー平等」という言葉に触れ、意識する機会になることを願っております。

末筆になりますが運営事務局をはじめ、開催にご協力いただいた関係各所のご尽力に感謝申し上げます。



閉会式での記念撮影

報告 志牟田 美佐子 (第46回男女平等参画フェスタ in リーブラ2026 実行委員長 / 新日本婦人の会 港支部)



新日本婦人の会 港支部



ウクライナ〜Dzherelce〜

港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦
Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254
▶<https://www.minatolibra.jp/>



講座情報等をメールマガジン「クラブL」で配信しています。
登録はこちらから ➡

アクセス

- JR「田町駅」東口（芝浦口）徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線・三田線「三田駅」A6出口 徒歩6分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス（田92・99）「田町駅東口」徒歩6分



港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」90号 2026年9月発行
発行：港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉

